



1. だれがみつけた？—「成川式」の発見、研究史—



成川式土器の研究の道

橋本達也



図1 E. S. モース(明治7年)

1 日本考古学のはじまりと「成川式土器」の発見

成川式土器とは1957・58(昭和32・33)年に発掘調査された成川遺跡から出土した土器を標識として名付けられた土器である。現在、おおむね古墳時代の土器と知られるこの土器は、ながく弥生土器として理解されてきた。ここでは、この土器に関する研究の歴史をみよう。

いま成川式土器とよぶこの土器を、最初に学術資料として見出したのは、明治初期にやってきたアメリカ人学者、大森貝塚の発掘で知られるエドワード・シルベスター・モースである。モースは1879(明治12)年5月、鹿児島に調査にやってきた。その際に、垂水で東京大学の「大学博物館のためとて、変わった形をした卵形の壺を貰った。これは高さ14インチで、最大直径の部分に粘土のヒモがついている。いうまでもないが赤い粘土厚くて重く」と日記に記している(石川訳1970)。成川式土器の壺を東京大学の大学博物館の資料として収集したのである¹⁾。

また、モースはアメリカに帰国後、自らのやきものコレクションをボストン美術館に寄贈しているが、その中には成川式土器も含まれている。周到に配置された棚の位置からみて古代の土器として収集されたことがわかる²⁾。

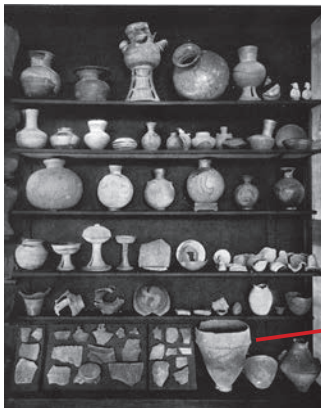


図2 ボストン美術館モースコレクションの成川式土器



つづいて、スコットランド出身の医師で考古学の研究にも取り組んだN.G. マンローが、1914(大正3)年10月から鹿児島に滞在し、いくつかの遺跡の調査を行った。

その一つ、大隅のクヌギノハラでは貝塚を発見し、「中間土器」の発見を報告している(マンロー1915)。これは現在のたるみずしくぬきぼる垂水市柘原の地であるが、現地に関しては詳しくは説明していない。なお、「中間土器」とは弥生土器であり、またそれに



図3 鹿児島で調査中のN. G. マンロー

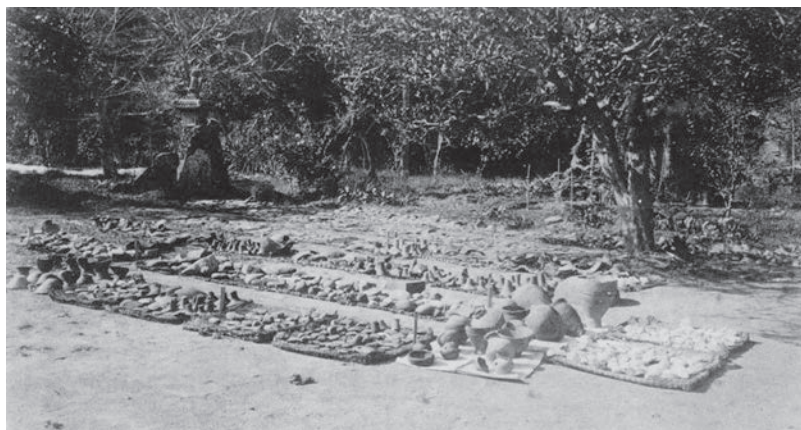


図4 マンロー調査による垂水市森平及びサコノヒラ出土遺物



図5 マンローがケンブリッジ大学に寄贈した垂水市浜平出土資料、芹沢長介調査

「^{いわいべ}齋瓶の破片」、すなわち須恵器と一緒に出土することも記録している。また同じく森平村字浜平の貝塚から、「中間土器」と石器などを発見した。これは垂水市浜平であるが、この際に発見した遺物の写真が、図4であり、その一部はケンブリッジ大学に寄贈されている³⁾ (図5・芹沢1977)。

図4を一見して、大量の成川式土器が並べられている様子がうかがえるが、モースの調査も垂水港から柁原の字軽砂あたりまで行われたと考えられ、森平もその範囲に入っている。また、この付近で大量の成川式土器を出土した遺跡としては^{うしろがさこ}後ヶ迫A遺跡が現在知られているが、マンローが土器を並べているのは、^{きりめあうじ}切目王子神社であるとみられており、そうであれば軽砂、後ヶ迫A遺跡はまさに至近の場所である。モース、マンローが成川式土器を得たのはこの遺跡ないしはその近辺であろう。



図6 橋牟礼川遺跡 浜田耕作の発掘調査(上)とその現況(下)

2 縄文-弥生論争、黎明期弥生土器研究と「指宿上層式土器」

1919(大正8)年刊行の『京都帝国大学文学部考古学研究報告 第3冊』には「弥生式土器形式分類聚成図録」という附編がある。全国各地の弥生土器が収載されているが、その中に薩摩・大隅地域の土器もあり、そのほとんどが「成川式土器」である。これが鹿児島県の弥生土器研究のはじまりであり、またこの後、長く弥生土器として認識される道を歩んだ「成川式土器」の出発点であった(浜田1919)。

同じ1919年の4月、京都帝国大学教授の^{いぶすきはしむれがわ}浜田耕作は指宿市橋牟礼川遺跡を発掘した。ここでは、開聞岳の噴出物をはさんで縄文土器が下の地層、弥生土器が上の地層から出土し、当時まだ存在していた縄文土器と弥生土器の違いは使用者・人種の違いであるという仮説を否定し、縄文土器と弥生土器は時期差であることを証明する学史的に画期的な成果となった。それは1921(大正10)年に報告されている(浜田1921)。

...のであるが、ところが当時、弥生土器と認識されていたこの上層土器は、いまになってみれば「成川式土器」であった。学史上の縄文土器と弥生土器の評価に関する重要性は変わることはないが、結果としては縄文時代と古墳時代の土器、なかでも古墳時代後期の土器を比較していたのである。成川式土器が、形態的特徴から大正時代において弥生土器と認識されたのはむしろ当然のことであった。この土器が古墳時代の土器と認識されるのは1980年代を待たなければならず、その弥生土器以来の伝統的な形態こそが成川式土器の特徴とも言えよう。

その後、1939(昭和14)年の東京考古學會の『弥生式土器聚成図録 正編』では南九州の弥生土器の集成もなされており、また資料が少なく暫定的なものとしながらも、それらにA・D・C・Eの順に変遷する4様式が設定された。そのうちC様式が、橋牟礼川遺跡の資料を基準とした後の「成川式土器」であった。主として実測を担当した小林行雄や藤森栄一の目にも「成川式土器」は弥生土器として映っていたのである(小林編1939)。

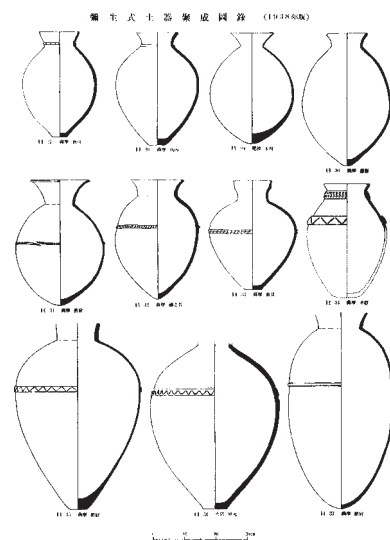


図7 「成川式土器」を中心とする『弥生式土器聚成図録 正編』南九州地方の壺

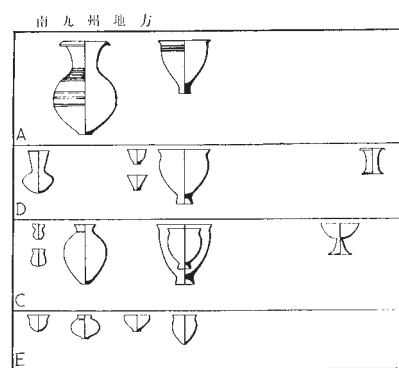


図8 南九州の弥生土器についてはじめての編年(『弥生式土器聚成図録 正編』)、C様式は「成川式土器」

3 戦後の弥生土器研究、「薩摩式土器」の時代

戦後、1950・52(昭和25・27)年に鹿児島県の弥生土器分類を発表した^{てらしみに}寺師見国は今日の成川式土器を「薩摩式土器」として把握し、それ以降、各遺跡報告等においてもますます弥生土器としての認識が固定されていくこととなった(寺師1950・1952)。

^{かわぐちさだのり}河口貞徳が1952(昭和27)年に発表した「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」では(河口1952)、鹿児島市

笹貫遺跡において「齊瓮土器」が包含層中の上層部で出土すること、鹿児島市の鹿児島大学遺構内遺跡郡元団地でも弥生式土器に少量の「齊瓮」が搬出すること、南大隅町千足遺跡でも「齊瓮の蓋形土器」と弥生土器の鉢形土器が並んで出土し、また弥生土器大壺の側から鉄製刀子が出土したことを報告している。河口による意欲的な調査・研究の蓄積のなかで、弥生土器に「齊瓮土器」すなわち須恵器が伴うことが頻度高く観察されているのだから、弥生土器という認識に変わりはない。むしろ、当時はまだ古墳時代土器としての土師器研究が十分進んでいなかったことや、時代区分と土器型式の関係があいまいな認識であったため、鹿児島では須恵器を使う時代＝古墳時代まで、弥生土器が存続するという考えを生み出すに至った。

またこの論文では、河口も弥生土器の分類を行っており、「成川式土器」に相当する土器を3様式と4様式に二分している。この細分は、中津野遺跡の発掘調査を受けた画期的な成果であった。ただ、この段階では中津野出土土器を含む様式を笹貫遺跡出土土器よりも後出するものと位置づけていた。これは後に前後逆であったことが理解されるようになる。

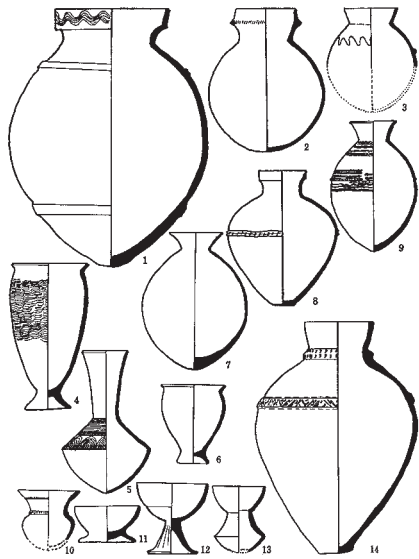


図9 森貞次郎が示した東・南九州の弥生後期土器、最下段は「成川式土器」

4 成川遺跡の発掘調査報告書と成川式土器

1957・58（昭和32・33）年、指宿市山川町成川遺跡の発掘調査が行われる。これによって大量の土器が出土し、その後の研究に大きな影響を与えることとなった。「成川式土器」はこの遺跡の名称から採られた名である。ただし、1974年刊行の報告書で言及はあるものの、まだその名称は一般化しておらず、それは1980年代に入ってからのことである。

森貞次郎は、1966年に九州の弥生土器を総覧するなかで（森1966）、薩摩式は、弥生終末から関東の和泉式に相当するものを含み、5世紀末を中心とする鉄器も存在することから、弥生の下限を超え、長期存続する土器であることを指摘した。そして、この段階でも「成川式」の甕が弥生前期の甕、壺が弥生後期の壺としてとして図示されている。

同時に、薩摩式段階は、装飾文様が地域的特色を濃厚にあらわし、他の地域からは隔離された生活環境にあるとし、「薩摩式土器の文化圏は隼人の地域と一致する後進地域である。熊襲・隼人の伝承はこの地域の古墳文化浸透期に成立したものであるに相違ないが、弥生後期終末以降の後進的な地域性がその背景をなしている」として成川式土器と隼人を結びつけるような言説が現れた。九州南部の考古資料にみられる地域性を熊襲・隼人と結びつけ、また社会の停滞などとして理解する動向は、古墳時代の墓制研究とも一体のものとして、成川遺跡の発掘調査後、とくに昭和40年代以降に広がる認識である。

この時期、河口貞徳は1968年の『弥生式土器集成』において、弥生土器をI～V様式に分類し、その第V様式に「成川式土器」をあて、成川遺跡出土土器実測図も多く収載した（河口1968）。また1971年の「土師式土器集成」では、「成川式土器」の名称を用い、この土器を弥生終末に位置づけつつも、土師器に属するものを含むことを指摘している⁴⁾。成川遺跡の発掘調査以来、成川式土器という名称も使われるようになっていたようだが、公に「成川式土器」の語が使用されたのは、これが初出であろう。

1974年、成川遺跡の報告書が刊行された。大量に出土した土器のなかには、土師器として認識されるものが含まれており、そのため成川遺跡は弥生時代終末を中心するものの、中央では古墳時代に入っていた、すなわちこの遺跡、あるいは鹿児島では、中央＝近畿よりも文化が遅れて伝存していたと指摘している。「当地方においては、在来の弥生式土器の文化から新しい土師器文化への転換がきわめて緩慢で、両者併存の期間もまた長

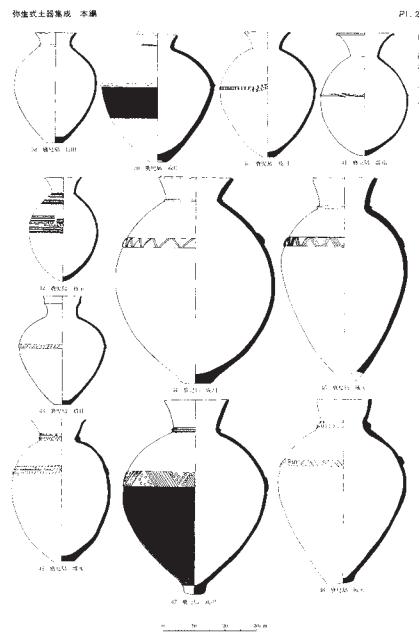


図10 成川式土器を中心とする河口1968『弥生式土器集成 本編1』南九州の壺

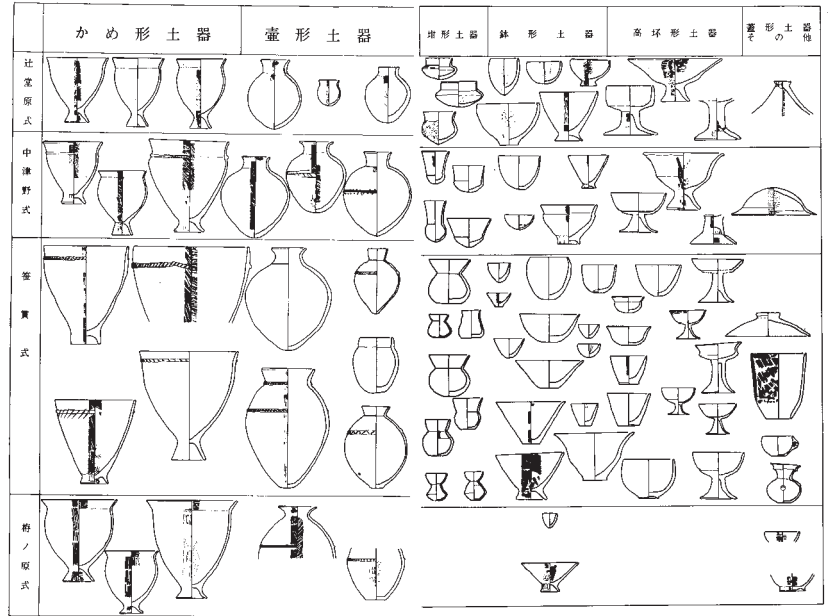
かった」という鹿兒島の特異性、停滞性を強調するような指摘が行われている(田村編 1974)。このような鹿兒島の古代に対する辺境史観は、とくに1970年以降の主流となるが、今日では受け入れることのできない学説である。

5 成川式土器研究の展開

1970年代後半からは鹿兒島県下でも文化財保護行政が整備されはじめ大規模な調査が行われるようになり、資料数が増加しはじめたこともあって、あらたな展開が生じる。1980年には池畑耕一(池畑 1980)、1981年には多々良友博(多々良 1981)が、弥生後期から古墳時代土器としての成川式土器の細分と編年体系の構築を目指した意欲的な論考を相次いで発表した。この段階になってようやく成川式土器は弥生土器という枠組みから本格的に抜け出し、その大部分が九州南部独自の古墳時代土器であることを評価できるようになった。須恵器と相伴することも正当に評価されるようになった。

これらを受けて、その総合的な編年研究の総括として登場し、今日も影響力を維持し続けているのが、中村直子の1987年の「成川式土器再考」である(中村 1987)。中村は成川式土器として、中津野式土器から東原式、辻堂原式、笹貫式という変遷を構築し、それが弥生終末から古墳時代後期まで該当するとした。その後、その終末が7~8世紀にもおよぶことがあらたな視点として加えられているが、本論考で示された成川式土器の分類、変遷観はおおむね現在の研究でも踏襲されており、それを基軸として、さらに詳細な編年、小地域性、使用形態などの研究が進んでいる。

今後とも、鹿兒島の古代史をあきらかにする上で成川式土器の詳細な研究の進展が期待されるが、近年の発掘調査によってあらたに良好な資料も増加しており、編年や分布などの基礎的な研究の再検証も必要な段階となってきた。とくに、古墳時代土器の研究は、他地域で一層精緻な分析が進んできており、それらとの併行関係を再検討した上で、弥生・古墳・古代各時代の社会的な動向のなかで成川式土器とは何かを位置づけるような研究が必要になってきているといえるであろう。



鹿兒島	北九州	瀬戸内	山陰	畿内	東日本
松木崗	下大隈	上東 鬼川市Ⅱ	九重	第Ⅴ様式	前野町
辻堂原	西新	才の町Ⅰ	鷺尾Ⅰ	遷向Ⅰ	
300AD	中津野	宮ノ前Ⅱ	酒津	鷺尾Ⅱ	庄内
	柏田Ⅱ	下田所	小谷	布留	五領
	柏田Ⅲ	龜川上層 檜多摩寺 下層Ⅱ			
野	湯納D5	走出			
400AD	野方1001				
500AD	笹貫				和泉
600AD	梅ノ原				鬼高
700AD					

図 11 池畑 1980 の成川式土器編年

年代	森貞次郎 1966	平島勇夫 1977	平田信芳 1979	池畑耕一 1980A	多々良友博
1世紀	山ノ口式土器	Ⅰ式	A類	Ⅰ式	Ⅰ期
2世紀	山ノ口式土器				
3世紀	山ノ口式土器	Ⅱ式	B類	Ⅱ式	Ⅱ期
4世紀	薩摩式土器				
5世紀	薩摩式土器	Ⅲ式	C類	Ⅲ式	Ⅲ期
6世紀	薩摩式土器				
7世紀	薩摩式土器	Ⅳ式	D類	Ⅳ式	Ⅳ期
	薩摩式土器				
	薩摩式土器	Ⅴ式	E類	Ⅴ式	Ⅴ期
	薩摩式土器				

第1表 成川式土器編年比較表
(暦年代については森(1966)氏による)

主な遺跡	
Ⅰ期	松木崗遺跡溝状遺構Ⅰ期
	松木崗遺跡溝状遺構Ⅱ期a
Ⅱ期	松木崗遺跡溝状遺構Ⅱ期b・村原(梅ノ原)遺跡3・5・6号住居跡
Ⅲ期	中津野遺跡
Ⅳ期	辻堂原遺跡溝状遺構2号、萩原遺跡1号(円形)住居跡
Ⅴ期	辻堂原遺跡溝状遺構1号・13・17号住居跡、東原遺跡Ⅰ-57・58区住居跡
Ⅵ期	辻堂原遺跡62・66・90・93号住居跡
	植平遺跡B-Ⅱ区住居跡
	辻堂原遺跡38・88・89号住居跡、萩原遺跡50号住居跡
Ⅶ期	辻堂原遺跡12・14・15・18・23・26・44・51・55・58・68・71・72号住居跡
	萩原遺跡2・39・46・58号住居跡
	植平遺跡D-Ⅳ区住居跡
	入来遺跡6・8号住居跡

第2表 成川式土器細分案

図 12 多々良 1981 の成川式土器編年

註

- 1) また、東京帝国大学、明治31年刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』には、「大隅国肝属郡垂水郷柗原貝塚 土器、石器 人類学教室藏品」がある。あるいはこれはモースの調査によるものの可能性はあろうか。
- 2) 甕以外にも、その上段の棚の壺やさらにその上の高杯など小型器種にも成川式土器が含まれているようにも見えるが、写真だけでは判断できない。
- 3) ほか同志社大学にもマンローの成川式土器が所蔵されている（岡本 2013）。
- 4) このほか河口貞徳は1981年の編年提示において、中津野遺跡出土土器を標識として弥生第Ⅷ様式を弥生時代後期後葉に位置づけている。1980年代前半はまだ土器様式とその帰属時期はかなり不安定であった。

引用文献

- 池畑耕一 1980「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号 鹿児島県考古学会
- 岡本孝之 2013「鹿児島のマンロー」『N.G. マンローと日本考古学—横浜を掘った英国人学者』横浜市歴史博物館
- 河口貞徳 1952「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 鹿児島県考古学会
- 河口貞徳 1968「南九州地方」『弥生式土器集成』本編1 東京堂出版
- 河口貞徳 1971「鹿児島県」『土師式土器集成』本編1 東京堂出版
- 河口貞徳 1981「新南九州弥生式土器集成」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- 小林行雄編 1939『弥生式土器聚成図録』正編 東京考古学会学報第1冊 文星堂
- 芹沢長介 1977「マンローがケンブリッジ大学に寄贈した日本の資料その他について」『考古学研究』第24巻第3・4号 考古学研究会
- 多々良友博 1981「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- 田村晃一編 1974『成川遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告第7 文化庁
- 寺師見徳 1950「鹿児島県の弥生式土器」『考古学雑誌』第36巻第1号 日本考古学会
- 寺師見徳 1952「鹿児島県の弥生式土器」『鹿児島県考古学会紀要』第1号 鹿児島県考古学会
- 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿児島考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 浜田耕作 1919「弥生式土器形式分類聚成図録」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3冊 京都帝国大学
- 浜田耕作 1921「薩摩国掛宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第6冊 京都帝国大学
- 森貞次郎 1966「九州」『日本の考古学』Ⅲ 弥生時代 河出書房新社
- E. S. モース（石川欣一訳）1970『日本その日その日』東洋文庫172 平凡社
- Edward S. Morse, Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery, Cambridge, Printed at the Riverside Press, 1901
- N.G. マンロー 1915「太古の大和民族と土蜘蛛」『考古学雑誌』第6巻第4号 考古学会

はしむれがわ
橋牟礼川遺跡いぶすきし
指宿市

左4つの写真はいずれも弥生土器と認識された成川式土器。右端写真は須恵器。この調査の際にも成川式土器とともに須恵器が出土している。

浜田耕作 1921より転載

京都大学総合博物館蔵